

# 村上春樹「風の歌を聴け」論

—物語の構成と〈影〉の存在—

山 根 由美恵

はじめに

村上春樹「風の歌を聴け」は、前田愛<sup>1</sup>氏の「不連続な時間がモザイク状に継ぎ合わされているテレビの番組を視聴するように読みすすめるのがもっとも自然な読み方なのかもしれない」との評に代表されるように、不規則に並べられた断片と主人公「僕」が陥穽する態度によつて、意味の重さを回避するテキストとして捉えられてきた。しかし、「風の歌を聴け」は本当に不連続な時間がモザイク状に継ぎ合わされたテキストなのだろうか。むしろ、不連続と捉えられてきた配列に戦略的な構成意識が窺えるのである。本稿では、テキストに挿入された歌「カリフォルニア・ガールズ」に着目し、「風の歌を聴け」が、二つの〈影〉からなる「僕」の内的世界の物語であること、〈影〉によつて自らの「存在理由<sup>2</sup>」を失った過去が浮かび上がってくることを明らかにする。そして、現代における物

語性という観点から「風の歌を聴け」の位置づけを試みたい。

— — 「カリフォルニア・ガールズ」の機能

従来、「風の歌を聴け」の2章「この話は1970年の8月8日に始まり、18日後、つまり同じ年の8月26日に終る」という一文は、意味を「空無化」させる記号として扱われており、3章から指示された物語「この話」が始まると考えられてきた。しかし、近年この一文に重きをおいて「風の歌を聴け」を読む動きがある。次頁の表1を参照していただきたい。加藤典洋<sup>3</sup>氏は8月8日を11章のラジオ番組の場面、米谷みゆき<sup>4</sup>氏は8章の小指のない女の子の登場の場面という説を掲げた。しかし、「この話」の始めの日にズレがあるこの問題は、ポップアートのようなものとしてのみ扱われていた「カリフォルニア・ガールズ」の存在によつて、本稿の問題意識の出発点とした企図された構成の一つと考えることができる。





すなわち、「カリフォルニア・ガールズ」こそが懸案の『この話』を開き、そしてその物語を閉じる鍵なのである。

表1は、縦軸に主人公「僕」の時間軸を対人関係に関わらせて、I 29歳、II 21歳（鼠・小指のない女の子・D J）、III 過去（1969年8月15日）〜1970年4月4日、1967年、1963年）という七つの世界に分けたものを配し、横軸に全40章よりなる作品の章を取り、作成したものである。「カリフォルニア・ガールズ」は、12、13、15、17、39章に現れ、最初の登場は12章におけるラジオ番組と「僕」の対話の場面である。この章は加藤氏が8月8日と定めた日と同じ日の出来事である。そして、最後の登場が39章であり、その直前の38章に8月26日という記述がある。以上のことから、『この話』の始めと終りに「カリフォルニア・ガールズ」が配置されているという推測が成り立つ。

実際の「カリフォルニア・ガールズ」関係の章を検討する。11章はラジオ番組。12章は僕の高校時代のクラスの女の子がこのラジオ局に「僕」宛にリクエストし、番組から「僕」の家に電話がかかるという同じ日の出来事。13章は「カリフォルニア・ガールズ」の歌詞。14章はラジオ局から送られて来たTシャツの絵。これらの四章は、モザイク的構成と評されるこのテクストの特徴を最も典型的に表すように、分断した章の連続である。しかし、初めてラジオ番組という一貫した世界、因果関係を持つ繋がりが四章連続している。

そして、15章の「僕」は、14章でもらったラジオ番組のTシャツを着て、「カリフォルニア・ガールズ」を探しにレコード店に行く。そのレコード店で働いていたのが8章で登場した小指のない女の子であった。この事実は注目し値する。「風の歌を聴け」は、「僕」と鼠、「僕」と小指のない女の子、「僕」とD Jという三つの世界が平行線のまま、繋がる事がなかった。しかし、15章において「僕」とD Jの世界の話題「カリフォルニア・ガールズ」が、「僕」と小指のない女の子の世界に登場した。これは断片で構成されていると考えられていたテクストが、因果関係を持つて繋がりがつあるという重要な変化である。次の16章は、「僕」が小指のない女の子のレコード店で買ったレコードを鼠にプレゼントするという粗筋である。ここにおいても「僕」と鼠の世界に小指のない女の子の世界が入り込む。つまり、「カリフォルニア・ガールズ」は、錯綜していた21歳の「僕」と鼠、「僕」と小指のない女の子、「僕」とD Jという三つの世界の蝶番として機能しているのだ。

「カリフォルニア・ガールズ」の最後の登場は39章で、29歳である現在から語る形式となっている。「カリフォルニア・ガールズ」のレコードは、まだ僕のレコード棚の片隅にある。夏になるたびに僕はそれをひっぱり出して何度も聴く」ということから、「カリフォルニア・ガールズ」を聴くことは、29歳の「僕」にとって過去を想い出すための儀式的な行為として考えることができまいだろうか。

以上より、

一、「カリフォルニア・ガールズ」が登場してから「風の歌を聴け」の中には因果関係を持った物語が展開していく。

二、「カリフォルニア・ガールズ」は、21歳の三つの世界を繋げる機能を終えた後しばらく登場せず、8月26日の後に再登場する。

という二点が明らかになった。「カリフォルニア・ガールズ」には、錯綜する世界を繋げることで「この話」という物語をいわばONの状態にし、8月26日という日が語られた後に「この話」をOFFの状態にする鍵となる存在としての機能が見えてくる。

## 一―二 『カリフォルニア・ガールズ』の必然性

次に、「この話」を開き、閉じる鍵が「カリフォルニア・ガールズ」であることの必然性について検討する。「カリフォルニア・ガールズ」の歌詞の中で、13章と39章においてそれぞれ引用されている「素敵な女の子がみんな、カリフォルニア・ガールならね」(I wish they all could be California girls)の意味を考えたい(尚、作中に挿入された歌の中で歌詞が二度引用されているのは「カリフォルニア・ガールズ」だけである)。この一文から、主体が現在居るところに女の子が不在であることが言えるだろう。そして、村上

は「カリフォルニア・ガールズ」を歌っているビーチ・ボーイズについて次のように述べている。

そしてブライアン・ウィルソン自身が実はサーフィンなんて生まれてから一度もやったことがないのだという事実も知った。実は彼は水が怖くて、海の近くに寄るのさえ嫌だった。ブライアンは精神的なトラブルを抱えた孤独な青年であり、音楽は彼にとつて夢を見るための手段だった。そして夢を見ることは彼にとつてひとつのセラピーであり、また過酷な現実の中で生き残り成長するために必要な作業だった。(中略)

そして歳月は巡り、ビーチ・ボーイズは生きた伝説になった。(略)しかしブライアンはもうそこにはいない。ブライアンがビーチボーイズの魂であり、心臓であったとすれば、その魂はすでに凍り付き、心臓は鼓動を止めてしまった。彼らがその長命を誇れば誇るほど、彼らはより多く死んでいくように見える。(略)死者の目を覚ますべく元気に飛び回るマイク・ラウのと<sup>5</sup>なりで、彼が僕らに向かつて語りかけるのは夢の記憶ではなく、夢の不在だ。彼が示しているのは、一度と戻ってはこない何かだ。ビーチ・ボーイズの音楽的リーダー、ブライアン・ウィルソンは、海やサーフィンを題材にしながらも泳ぐことができず海を恐がり、孤独で精神的に屈折した男である。つまり、ブライアンが歌い上げている美しさ、永遠のイノセンスは現実のものではなく、架空の世

界として描かれているのだ。「彼が僕らに向かつて語りかけるのは夢の記憶ではなく、夢の不在だ。彼が示しているのは、二度と戻ってはこない何かだ」からわかるように、ピーチ・ポーズは、村上にとつて夢の記憶を伝えるのではなく、夢の不在を感じさせる存在なのである。この夢の不在を伝える存在としてピーチ・ポーズを捉え直すと、「風の歌を聴け」の「この話」には不在の夢が、さらに「カリフォルニア・ガールズ」という歌によって不在の女性が描かれていると考えられるのだ。次節では、「この話」に含まれない物語（3章から10章）に着目し、「この話」を逆照射してみたい。

## 二 〈影〉の誕生

加藤氏、米谷氏は、「この話」に含まれない物語の意味を問うことはなかったが、私はここに重要な機能があると考える。すなわち、「この話」に含まれない物語に登場する鼠と小指のない女の子の二人は、実在する人物ではなく、「僕」の内的世界の像〈影〉として描かれているのである。

5章で鼠は「僕」に自分の作った小説、難破船で偶然助かった男がまたそれぞれの道を選び別れる話をする。6章では架空の小説だった難破船に乗った男女の再会の様が、鼠と女の実際の会話として語られる。話は変わり8・9章において、「僕」はジェイズ・バーで酔っぱらって意識不明だった「小指のない女の子」を介抱した

が誤解を生む。「僕」と彼女の最後の会話において「昨日の夜のことだけど、一体どんな話をしたの」と問われた「僕」は「ジョン・F・ケネディー」の話題をしたと告げている。9章の段階で「ジョン・F・ケネディー」によって、バーという同じ空間で女性と同じ話題をしたという繋がりが生まれる。難破船に乗り合わせた男女の別れと再会という架空の小説が鼠と女の実際の会話になり、さらにそれが「僕」と小指のない女の子のこととして語られているのだ。ここで「僕」と鼠が同一人物、結論を先に述べると、「僕」の〈影〉である可能性が生まれる。それに伴い「小指のない女の子」が「鼠」の創作した小説の中の人物であり、鼠と同様に「僕」の内的世界の像〈影〉である可能性が生まれるのだ。

実際にこの二人がどのように作品に描かれているか検討する。「僕」と鼠の関係については、吉行淳之介氏が「鼠という少年は、結局は主人公（作者）の分身であろうが」と評してから、鼠が「僕の分身」という説はほぼ定説の感がある。ここで「僕」や作者の「分身」として曖昧に捉えられてきた「僕」と鼠との関係を厳密に考えたい。私は、鼠という人物を「僕」の無意識下における内的世界で造りあげられた像〈影〉という概念、強調したいのは内的世界にのみ存在する人物として捉えたい。実際に「僕」が初めて鼠と出会ったのは、「三年前の春のこと」で「僕たちが大学に入った年」（4章）

18歳の春である。この時期の「僕」は「高校の終り頃、僕は心に思うことの半分しか口に出すまいと決心した。理由は忘れたがその思いつきを、何年かにわたって僕は実行した」(30章)という状況にあった。つまり、「僕」が自らの言葉の半分を閉じた時期に鼠という人物が登場していることから、鼠は「僕」の「へ影」であることは明白である。

問題は小指のない女の子の位置である。平野芳信氏、斎藤美奈子氏は、小指のない女の子は鼠の彼女と同一人物であるとの説を、加藤典洋氏は「僕」と鼠とを結びつける媒介、米谷みゆき氏は三番目に寝た女の子を引き出すための手続きであるとの説を展開している。

小指のない女の子は双子で、もう一人の居場所は「三万光年くらい遠くよ」と僕に告げている(20章)。双子とは同じものが分裂したという状況であり、前田愛氏が言うように、「三万光年くらい遠く」という表現は死のアナロジーと言える。実際に、三番目に寝た女の子は仏文科の学生で自殺した(19章)。小指のない女の子はY W C Aでフランス語会話を習っている(33章)。一人が三万光年くらい遠くにおり、同じフランス語を学ぶという条件が揃っている。そして「へ影」であることを端的に示すのは、小指のない女の子が三番目に寝た女の子が死んでから「僕」の前に現れた女性であり、古い昔を思い出させる存在である(9章)ことだろう。小指のない女の子も、鼠と同じく三番目に寝た女の子の「へ影」、「僕」の内的世界

の像であることがわかる。

「僕」と「へ影」との対話が物語として成立することの証左として、32章の次の場面がある。32章では「ハートフィールド」の「火星の井戸」という作品の粗筋が紹介される。この作品の内容は、小林正明氏が指摘しているように、レイ・ブラッドベリ「待つ男」の変奏である。ここで留意したいのは、井戸に住んでいる火星人らしき存在が次々と人間の意識を乗っ取っていく「待つ男」と設定が異なっている次の場面である。

風が彼に向かってそう囁いた。

「私のことは気にしなくてもいい。ただの風さ。もし君がそう呼びたければ火星人と呼んでもいい。悪い響きじゃないよ。もつとも、言葉なんて私には意味はないがね。」

「でも、しゃべってる。」

「私が？　しゃべってるのは君さ。私は君の心にヒントを与えているだけだよ」

右は、ある若者が火星の深い井戸に潜り、そこから出てきた時現れた「風」と会話した場面である。「風」は若者に「しゃべってるのは君さ。私は君の心にヒントを与えているだけだよ」と語っている。この言葉は、柘植光彦氏や小林正明氏らが指摘しているように、若者が井戸、すなわちフロイトの第二局所論におけるエス(id)に

潜ることによって、「風」という無意識下の自己との内的会話を表している。この若者と「風」と同じ関係が「僕」と鼠、「僕」と小指のない女の子との関係にも該当する。鼠と小指のない女の子という登場人物は、実在する人物ではなく、「僕」によって造りあげられたものであり、自己の内的会話にのみ存在する〈影〉なのだ。

以上のことから、「風の歌を聴け」は「僕」の内的世界の物語であることが明らかになってくる。鼠と小指のない女の子という登場人物の実在を疑わせ、小説という虚構空間をさらに虚構化させて21歳の舞台を僕の内的世界として構築するという手法が見られる。

### 三 二つの〈影〉たちの「存在理由」

それではなぜ〈影〉が生まれたのだろうか。二つの〈影〉に注目したとき、過去の章の挿入に法則性が見られる（表1参照）。「僕」と三番目に寝た女の子との交流が挿入される場合には、小指のない女の子と「僕」の物語が挟む形、もしくは小指のない女の子と「僕」の世界から始まるベクトルの形である（ア①18・19・20章、ア②20・21・22章、ア③22・23・24章、ア④33・34・35章）。そして、「僕」の過去、特に1963年の出来事が挿入される場合には、「僕」と鼠の物語が挟む形、もしくは「僕」と鼠の世界から始まるベクトルの形になっている（イ①3・4・5章、イ②6・7・8章、イ③25・26・27章、イ④29・30・31章）。つまり、過去の章は二つの

〈影〉達によって浮かび上がるといふ形で構成されているのだ。実際に、小指のない女の子によって浮かび上がってくる過去の断片を次に掲げる。

三人目の相手は大学の図書館で知り合った仏文科の女子学生だったが、彼女は翌年の春休みにテニス・コート脇にあるみすばらしい雑木林の中で首を吊って死んだ。彼女の死体は新学期が始まるまで誰にも気づかれず、まるまる二週間風が吹かれてぶら下がっていた。今では日が暮れると誰もその林には近づかない。(19)

三人目のガール・フレンドが死んだ半月後、僕はミシユレの「魔女」を読んでいた。(21)

僕は以前、人間の存在理由をテーマにした短かい小説を書くこととしたことがある。(略) おかげで奇妙な性癖にとりつかれることになった。全ての物事を数値に置き換えずにはいられないという癖である。約8カ月間、僕はその衝動に追いまわされた。(略) 当時の記録によれば、1969年の8月15日から翌年の4月3日までの間に、僕は358回の講義に出席し、54回のセックスを行い、6921本の煙草を吸ったことになる。その時期、僕はそんな風に全てを数値に置き換えることによ



って他人に何かを伝えられるかもしれないと真剣に考えていた。そして他人に伝える何かがある限り僕は確実に存在しているはずだ。しかし当然のことながら、僕の吸った煙草の本数や上った階段の数や僕のベニスのサイズに対して誰ひとりとして興味など持ちはしない。そして僕は自分のレーゾン・テートゥルを見失わない、ひとりぼっちになった。

☆

そんなわけで、彼女の死を知らされた時、僕は「6922本の煙草」を吸っていた。(23)

これらの挿話はどれもただの連続性のない断片に見えるが、全て三番目に寝た女の子の死を知らされた日の「僕」に焦点を当てて描かれている。三番目に寝た彼女は1970年の春休みに自殺した(19章)。「僕」が彼女が死んだことを知ったのは6922本目の煙草を吸った日である(23章)。「僕」は、全ての出来事を数値に置き換えずにいられない癖を1969年8月15日から翌年の4月3日まで続けており、6921本の煙草を吸っている。「僕」が彼女の死を知った時6922本目の煙草を吸ったことから、彼女が死んだことを知ったのは、1970年4月3日の次の日4月4日である。彼女の死体は二週間誰にも発見されなかった(19章)。この二週間という期間は、半月とも言い換えられる(21章)。様々な言い方ではかすつとも、これら三章の記述は1970年4月4日を特

権化して描いている。小指のない女の子という〈影〉によって、「僕」がミシユレの「魔女」を読んでいた時に、彼女が二週間前に死んだことを知らされ、波線部「自分のレーゾン・テートゥルを見失ない、ひとりぼっちになった」という1970年4月4日の「僕」の物語が立ち上がってくるのだ。

そして、鼠によって浮かび上がってくる過去は1963年と1967年に焦点が当てられている。1963年には無口だった「僕」が社会と適合するために言葉との妥協を始め(7章)、同じ年に三番目に寝た女の子の人生で一番美しい瞬間がある(26章)。ここから出発した「僕」は、高校の終りころから言葉と自分自身の存在との齟齬が生じ、不完全な人間になった(30章)様子が窺える。

「風の歌を聴け」には、文章観が多く現れているが、その中でも「文明とは伝達である、(略)もし何かを表現できないなら、それは存在しないのも同じだ」(7章)に着目すると、「僕」はコミュニケーション能力が不完全な人間であり、そのことは文明社会に生きる自らの存在がゼロであると認識したに等しくなる。同じことは先に引用した23章の記述からも言える。「僕」は全てを数値に置き換えることによって、自らの存在を確認し、伝達しようとしたが、三番目に寝た女の子という最も身近な愛する女性にさえも「僕」の存在は伝わらず、「自分のレーゾン・テートゥルを見失ない、ひとりぼっちになった」のである。

1963年から始まった、言葉と存在との齟齬、コミュニケーションの断絶は、自らの「影」である鼠から引き出される。そして、愛する人（三番目に寝た女の子）が自殺した事実は、その「影」である小指のない女の子から引き出される。つまり、二つの「影」から自らの「存在理由」を見失った物語が浮かび上がってくるのだ。

ここで過去の章の間に挟まれた「影」の物語の意味が問われると思うが、この「影」の物語は過去をスムーズに引き出し、引き戻すための必要な手続きと考えることができる。33章は、小指のない女の子が「僕」に「あなたには嘘をついてたのよ」と語り、その理由を後で話すと言って終わる。嘘をつくことの連想として、「僕」が去年嘘をついた過去（34章）が挿入される。次の35章では、小指のない女の子が「僕」に「本当のことを聞きたい？」と語ることから始まる。33、34、35章の繋がりは、34章の「僕」が過去についての嘘の物語を引き出し、また現実に戻す関係にある。これらの関係は他の過去の章の挿入にも見られる。つまり、「影」の物語は、過去を引き出すために造られた内的世界の物語となる。ここで語られていることは事実ではないが、過去と対応した時真実の物語を語ることになるのだ。

以上の構造を本稿末尾の表2に表した。1963年、14歳の「僕」と三番目に寝た女の子という時間があり、1967年に「僕」と鼠が分裂した。そして、1970年4月4日に彼女が自殺したことを

「僕」は知る。この時に「僕」は「存在理由」を失った。この過去の物語が21歳の8月8日から8月26日の物語、「この話」の中で二つの「影」たちによって浮かび上がってくる。この「僕」の内的世界を、29歳の語り手「僕」が回想しているという三重、四重にもなる隠蔽、翰晦の戦略がこのテクストには施されている。しかし、この三つの時間を繋げるのが「カリフォルニア・ガールズ」なのである。21歳の時ラジオで流れることによって、「カリフォルニア・ガールズ」のように魅力的で美しかった14歳の彼女、そして彼女と過ごした日々を回想させるスイッチとなる。そして、その回想が8月26日に終わった時、過去から現実へ引き戻すために29歳の世界に登場するのだ。

#### おわりに

かくて、「カリフォルニア・ガールズ」で始まり、「カリフォルニア・ガールズ」で終る「この話」とは、自らの「影」鼠との訣別、愛する女性との訣別という現実があり、その不在の過去を希求することで「影」という存在を造り出し、対話した男の物語であると言える。すなわち、不在の夢、不在の女性を歌う「カリフォルニア・ガールズ」という装置によって、二つの「影」と対話する自己の内的世界に突入し、そこで己の最も深い傷である1970年4月4日の物語と、1963年という全ての元凶が生まれた年の物語という

二つの過去を思い出させ、そしてまた「カリフォルニア・ガールズ」に導かれつつ現実に戻るといふ戦略的な構成が見えてくる。

また、「風の歌を聴け」という題に着目すると、作中「風」といふ言葉の初めての登場が、「カリフォルニア・ガールズ」が登場し、三つの世界を繋げた次の章18章であり、最後の登場が8月26日の前37章であることの意味は大きいのではないだろうか。つまり、「カリフォルニア・ガールズ」が「この話」の最初と最後に位置し、その設定された物語の中でのみ「風」が吹いているのだ。「風の歌」とは「この話」といふ物語と言うことができる。そして、全ての物語を「影」が語り終えた時、「風」は「カリフォルニア・ガールズ」を生み出したラジオの世界に登場する。この意味は重要である。「僕」の内的世界というマイクロコスモスの物語が、ラジオというマイクロコスモスへ繋がる媒体に移行したからである。ここでマイクロからマクロへと「この話」、すなわち愛する女性の死と、コミュニケーション断絶により「存在理由」を失った過去といふ物語が伝達されていくのである。

「完璧な文章などといったものは存在しない」という一文で始まる「風の歌を聴け」は、文字通り完璧な文章によって愛する女性の死、自らの「存在理由」を失った苦悩を描ききってはいない。言葉への絶望から出発した人間がそれでも言葉による表現を試みて、実際にできたことは、苦悩の出来事を過去に据え、「影」といふ自己

の内的世界に変容させること、それだけでは意味を担わない記号を戦略的に並べ、分断させつつ最終的に意味を再構成することであった。ただ、この新しい物語は「存在理由」を失った人間の心の空虚感をよりリアルに表しえてもいたのである。この断片を再構成することで生まれた物語は、価値が多様化した現代において普遍性を持った内的体験の現実性を有す可能性を秘めているのではないだろうか。つまり、価値が多様化した状況における物語の可能性、断片を再構成することで生まれる新しい認識形態を有していることこそがこのテキストの真の価値なのである。

(注)

(1) 前田愛「僕と鼠の記号論」『国文学』S.60・3

(2) 柄谷行人氏は「多くの作家は、日付を省くことによって作品を「一般的」たらしめようとする。それに対して、村上はつねに特定の日時のために作品を位置づけている。しかし、それは歴史的意識のあらわれではなくて、その空無化をめざすものである。一見すると、それはそれらの日付を共有する読者にノスタルジックな世代的共感を喚起するかのように見える。だが、そうではない。これらの日付はまったく私的であり無意味なのだ」と述べている。(「村上春樹の「風景」(終焉をめぐる)」講談社学術文庫H7・6)

(3) 加藤典洋氏の論旨の展開を以下に記す。「1970年8月8日」は土曜日である。「風の歌を聴け」の中で、唯一土曜であることが分かる記述はラジオ番組である。このラジオ番組は12章との繋がりによって、「僕」と関

係する。よって、「8月8日」は11・12章の可能性が高いことから、「8月8日」を11章のラジオ番組の登場とする。「イエローページ村上春樹」荒地出版社H8・10)

- (4) 米谷みゆき氏は「この話」を「1979年8月」のカレンダーで読み、「8月8日」を8章の「小指のない女の子」の登場であるとす。しかし、テキストで指示された「1970年」を無視して「1979年」で読むことにはやはり無理があるだろう。〈編年体による1970年の物語—村上春樹「風の歌を聴け」を読む—(名古屋近代文学研究)H5・12)「死、復活、誕生、そして生きる」の意味—村上春樹「風の歌を聴け」—(昭和文学研究)H7・2)

(5) 英文は論者が私に載せた。出典([CALIFORNIA GIRLS]B. Wilson Ronder Music (London) Ltd. [THE BEACH BOYS greatest hits] 東莞—E. M. I LIMITED 1998)

(6) 村上春樹「神話力、1966、1983、そして」(FAN EXPRESS) No. 3 H6・6)

(7) 「選評」(「群像」S54・6)

(8) 平野芳信「風の風景、あるいはもう一つの物語」(日本全訳文庫)H3・12)

(9) 斎藤美奈子「変わりゆく妊娠小説」(「妊娠小説」筑摩書房H6・6)

(10) 注3に同じ。

(11) 注4に同じ。

(12) 注1に同じ。

(13) 小指のない女の子が三番目に寝た女の子の〈影〉であるという私の解釈と、米谷みゆき氏の「三番目に寝た女の子を引き出すための手続き」という説との相違点が求められる。確かに〈影〉は三番目に寝た女の子との過去を引き出すという意味で同じであるが、米谷氏は「カリフォルニア・ガールズの女の子」や鼠の彼女も三番目に寝た女の子と同一性を持

つと言及する。私は「小指のない女の子」は、「僕」にとつて「三番目に寝た女の子」という互換性を持たない唯一の人物を写す像として捉えているので、この点に関して米谷氏と相違する。

(14) 小林正明「井戸からイタ」(「村上春樹・塔と海の彼方に」藝文社H10・11) 柘植光彦「作品の構造から」(「国文学」H2・6)

(15) 「風の歌を聴け」というテキストにおいて、小説という虚構空間をさらに虚構化している意図は「あとがき」においても見られる。「アレク・ハートフィールド」は、先行研究によつて、アメリカのSF作家「ロバート・E・ハワード」や「カート・ヴォネガットJr.」の作品群における

作中作家「キルゴア・トラウト」をモデルにした架空の作家であることが確認されている。「あとがき」には「何年か後、僕はアメリカに渡つた。ハートフィールドの墓を尋ねるだけの短かい旅だ。墓の場所は熱心な(そして唯一の)ハートフィールド研究者であるトマス・マックリユア氏が手紙で教えてくれた」(最後になつてしまつたが、ハートフィールドの記事に関しては前述したマックリユア氏の著作、「不妊の星々の伝説」(Thomas McClure: The Legend of the Sterile Stars: 1968) から幾つか引用させていただいた」とある。1979年の時点で、村上は渡米したことは一度もない。トマス・マックリユア氏も存在しない。虚構化を取って「村上春樹」の名で「あとがき」という場で行っている。

本稿は、平成十一年度広島大学国語国文学会春季研究集会(平成十二年六月二十日)於広島大学における口頭発表に補筆したものである。席上、ご意見をいただいた方々に感謝申し上げます。

テキストは「風の歌を聴け」(講談社S54・7)に拠つた。引用文の傍線は全て私に付した。

——やまね・ゆみえ、本学大学院博士課程後期在学中——

表2 「風の歌を聴け」構造図

29歳(1978) 現在「僕」 〈回想〉		年齢	「僕」の現実世界
西暦	「僕」の内的世界	イ①	小さい頃 無口な年
		イ②	14歳 無口な秋風から平凡な年へ
		イ③	ハートファイブと出会う。 ものごしらえ開始。
		イ④	「レ・ミゼリコルディア」で手紙の文を 《三番目に嫁た女の子の 人生(風を吹かし開閉)》
		イ⑤	18歳 高校の終り頃 思ひだしのあひだに 出さな。
		イ⑥	「僕」半身を失う。
		ア①	20歳 三番目に嫁た女の子と出会う。
		ア②	全てを救世に思ひ残る瞬間(時) (8/15/1/1/3)
		ア③	10月 「つぎぎ」と言われる。
		ア④	21歳 3/20頃 三番目に嫁た女の子自殺 4/4 三番目に嫁た女の子の死を知る。 「存在理由」を失う
1970	21歳 「風の歌を聴け」舞台		
	「僕とは価値観の相違があるが、風と僕」 との会話	イ①	
	風の小説により 小指のない女の子と 三番目に嫁た女の子の影を 見る	イ②	
	8/8 『カリフォルニア・ガールズ』 この話ON	イ③	8/8 十重目のミチオ 『カリフォルニア・ガールズ』
	小指のない女の子が「愛」があり、 ジェエズバーへ行く。	ア①	
	小指のない女の子は巫女である。	ア②	
	小指のない女の子が去っていく。	ア③	
	風から彼女にまっすぐとほしう愛される が「愛」やめる。	イ④	
	風小説を書くことを決める	イ⑤	
	小指のない女の子「僕」をついて、 子供を産んでくれた。	ア④	
	8/26		8/26 十重目のミチオ 「僕」は君たちが「僕」だ

『この話』OFF

『カリフォルニア・ガールズ』を夏になるたびに区別